

学生大使 実施報告書

氏名：井上 嶺

学部・学科（コース）・学年：工学部建築・デザイン学科

派遣先大学：ガジャマダ大学

派遣期間：8/29～9/13

1 日本語教室での活動内容

日本語学習初心者と、中級者以上に応じて内容を変えて指導した。初心者～中級者は、単語や日本語特有のルール（敬語や漢字）などのボキャブラリーを増やすことを中心に、上級者に対しては話す・書くなどのアウトプットを中心に学習を進めた。具体的には、初めて日本語に触れる学生に対しては、まず簡単な挨拶や日常的に使える形容詞（かわいい、おいしい）などを教えた上で、50音表を用いてひらがな読み書きの練習などを行った。中級者以上は、簡単な文法や助詞、主語や漢字、数字などを学習した。上級者に対しては、会話によるアウトプットが主になった。上級者の学生は日本文化に造詣がある人が多く、日本人同士で話しているかのような高度な会話が可能だった。中には作文を書いてきてくれる学生もいたため、その添削を行うこともあった。全体を通して、学生の学習レベルは非常に高く、新しいこと・知らないことを知ろうとする姿勢があった。規則性や決まった「型」を見つけるとすぐに飲み込み、発展的な事柄にも応用できた。

2 日本語教室以外での交流活動

主な交流内容は食事や観光、また UGM 農学部 1 年生とのプランテーション体験イベントである。基本的に平日の食事はエージェントや、日本語教室で仲良くなったガジャマダ大学の学生ととった。昼食は学校のカフェテリアや学校付近の店で食べることができ、その際に学生の所属学部のキャンパスに連れて行ってもらうこともしばしばあった。校内の様々なキャンパスに足を運ぶことで、日本の大学の構造との比較や、学部の垣根を越えて交流する学生同士の姿を見ることができいい機会になった。夕食はタクシーやバイクでの移動を伴う学外のレストランや出店で食べた。日夜を問わず、食事中は UGM の学生と思いに会話ができる貴重な機会となった。それぞれの国の印象と実際に暮らしている立場からの意見交換や、日本にない文化や習慣への率直な質問など、会話内容はどんなものでも多文化理解において有意義なものになった。

観光としては、ボロブドゥール遺跡、クラトン宮殿、ムラピ山中腹に足を運んだ。各地で UGM の学生が説明をしてくれたので、それぞれの場所への理解を深めることができた。また、UGM 農学部のプランテーション校外学習にも同行した。この活動のおかげで、現地の学生のリアルな雰囲気を知り、ホテルなど外国人向けに作られ他施設以外での生活を体験したことでインドネシアの一般的な生活環境をよりはっきりと知ることができた。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私の参加目標は、「多文化を知って今（出発前当時）ある常識が常識ではないことに気が付く」とい

【学生大使 実施報告書】

うものだったが、この目標は達成されたと考える。インドネシアは日本と比較しようにも比較しきれないほど全てが異なる世界だったため、「日本という国における常識がどれほど世界に通用しないのか」を知るのには十分だった。ただし、それは決して悪いことではない。日本における常識は、長い年月をかけて独自に花開いたものであるということに自覚し、その常識や価値観に対する敬意や誇りを持つきっかけにもなったためである。

私が努力したことは、「遠慮しないこと」である。日本において遠慮することは1つの習慣・文化ともいえるかもしれないが、海外旅行という貴重な機会において遠慮は面白い経験や発見をする際に弊害になると考えたためである。やりたいこと、できないことをはっきりと伝えるよう意識した結果、彼らはにこやかに最高の経験をさせてくれた。

4 プログラムに参加した感想

私はインドネシアで直面した違いから多くのことに気付かされた。

1つ目は、宗教についての考え方である。神様の存在どうこうではなく、自分の持つ想いを1日に数回強く心に描き、お祈りする習慣は素敵なものだと思った。宗教は、単に神を信じ自分の時間や労力をささげる「洗脳」ではなく、生きていくうえで何を美德とし、つらい境遇から立ち上がるのかを誘導してくれる「指針」のようなものなのかもしれないと思った。

2つ目に、思ったことの伝え方である。現地でできた友人の多くは、誰に対しても自分の思いや感じたことをはっきりと伝えていた。時には否定的な発言もあったが、彼らは嫌な顔一つせず受け止め、今度は自分の意見を伝え、会話を続けていた。私は相手との関係性を問わずにこのような会話ができることをとても羨ましく思った。自分からはっきりと物事を伝えることで、相手もまた率直に思いを伝えてくれる。日本とは違うが素敵な文化だと思った。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回、私が実りある活動を目いっぱいそして危険なく行えたのは、現地のエージェントおよび学生のたくさんの優しさと気遣いがあったからである。ぜひ彼らへの恩返しとなる活動がしたい。今後私は、日本に向けた留学生を案内し、守る、すなわち今回と逆の立場のプログラムに参加したいと考えている。彼らの経験がより良いものとなるよう、言語、日本文化、そして自分の暮らす街についての理解をより深めていきたいと考える。

また、今回のインドネシアでの生活を通して、解放的で前向きな彼らの姿勢に刺激された。日本はとても小さく、その中で起こったさらに小さな出来事に一喜一憂する自分を客観視できるようになった。今後は何か失敗しても、くよくよと悩むのをやめようと思う。仕事大国、日本からの脱出先の候補ができた。

【学生大使 実施報告書】

